

秋彼岸追悼廻向之文

謹しみ敬つて真言教主大日如来、两部界会、諸尊聖衆、別わいては当山御本尊薬師如来、観音堂御本尊観世音菩薩、総じてはもう空法界一切三宝の境界に申して言さく。

耐え難き炎暑、酷暑の夏が過ぎ、新涼爽やかな秋を迎える。琵琶湖湖南の淨利安養寺境内のモミジ葉も、やがて満山を染めぬく美しい金系銀系のニシキ模様を織り出す準備を整えている。一方東方山麓ふもとの田畑の畔あぜには彼岸花が深紅の色を競い合つて咲きほこる。彼岸花の本名は曼殊沙華、天上に咲く花という。言葉は古代インドの梵語から生まれている。

令和元年九月二十三日は令和の年号に入って初めての彼岸会の日を迎える。この彼岸会を執り行われる熊谷俊亮住職は昨年四月全く予期せぬ腸がんを発症され大手術を施術され名医のもとで快復される。「ご本尊さまお大師さまのご加護、有縁の方々のご支援を賜りました」と深く感謝され一層のご精進を極められている。

そもそもお彼岸はインドのサンスクリット語で、パラミッタ、波羅蜜が語源で到彼岸とうの義ぎと訳される。向う側の岸という意味で、悟りの世界を指している。つまり、彼岸に至るといふのは悟りの世界しに到ることを意味する。これに對して迷いの世界であるこちらの世界を此岸、

この岸という。苦しみの多いこの娑婆世界しゃばである此岸から悟りの世界である彼岸に到ることが出来れば、そこには不安のない安楽、快樂けらくの世界が開けると仏教は説いている。とくに、日本では古くからこのお

彼岸の時期に先祖を供養する風習が伝えられてきた。これは先祖が悟りの世界に到れるように、と生きている私たちが願い、供養するところが相応したからである。日本を含めて東北アジア、それに東南アジアの稲作文化圏に先祖崇拜、先祖供養の宗教、習俗が比較的濃密に認められ「供養の文化」を形成してきた。

私ども農耕民族は、先祖の時代から毎日、田畑を耕し種をまき、施肥、肥料を与え加えて水加減をする。結果、実りの秋にその収穫が米俵何俵という形で現われる。このように、日頃から一生懸命精進、努力、修行して、煩惱を取り払っていく、その結果、清浄な心が現れ、悟りの境地を体得することができるところからである。

自然の恵み、自然崇拜、恵みをもたらす力と仏の力、こうした思想が農耕民族の中に深く広まっていったのである。

たてまつ

先祖とは、まさに「ご先祖さま」とあがめ奉る大切なおことばである。いま私たちが生きていられるのは父がいて母がいるからで、その上にも「祖父」「祖母」がいるように、過去に段階的に血のつながりがある人達がいたからである。そもそも、祖とは「その家系の最初の人、

おうち

先祖、祖先」という意味になる。「先祖代々」とは、その家における歴代の方々の総称である。崇拜とは、あがめ敬うこと。そして帰依して信仰することである。かつてお釈迦さまの骨、舍利を崇拜し、教えを信仰して救済を求めて、仏塔に集会するようになった。何かにあやかりたいという人間の心理、群衆心理が自然崇拜という行為に結びついたのである。先祖といっても遠くの呼び名でない。それはまず両親か

よよせせ

ら始まる。血を分けた世々生生父母兄弟になる。そして広く他人というものは一人もいなくて、重々無尽にアミの目のようにつながる。大きな縁起観もここから出てくる。縁起とは持ちつ持たれつの相互扶助

を意味する。ことばをかえると「おかげさま」である。みんな、大いな
る命、大日如来の命から生まれて、その源みなもとに還えるのである。弘
法大師さまは「相互礼拝」「相互供養」を説かれて人々がいかに幸せに
生きて暮らせるか濟世利人の道をお示し下されている。そこに供養は、
死者との再会であり、懐しい対話を行うときである。さらに死者を
慰めるというだけでなく、自分自身を見つめ、自分自身を供養する
ことに重要な意味があると説き明かされている。

別して本日、^{ベッ}ご参集の方々、息災延命、子孫長久、家内安全、
福壽満足、乃至法界 平等利益

令和元年九月二十三日

京都府向日市寺戸町西垣内十五―六十四

亀光庵

沙門 土口哲光

敬白